

2023年『沙石集』現代語訳

次の文章は『沙石集』の一話「耳売りたる事」である。

これを読んで、後の設問に答えよ。

南都に、ある寺の僧、耳のびく厚きを、ある貧ひん

奈良に(おいて)、ある寺の僧が、

耳たぶが厚いのだが、

(別の)ある貧しい

なる僧ありて、「アたべ。御坊の耳買はん」と云ふ。

僧がいて、

「ください。」

貴坊の耳を買おう」

と言う。

「とく買ひ給へ」と云ふ。「いかほどに買ひ給はん」と

(耳たぶが厚い僧が)「すぐに買ってください」と言う。(さらに)「どのくらい(の価格)で買いなさるか」と

云ふ。「五百文に買はん」と云ふ。

言う。(耳を買いたがっている僧が)「五百文で買おう」と言う。

「さらば」とて、銭を取りて売りつ。

(耳たぶが厚い僧が)「それならば(良いだろう)」と言って、金銭を受け取って売ってしまった。

その後、京へ上りて、相者のもとに、耳売りたる僧と

その後、

京都へ行って、

人相見のところに、

耳を売った僧と

同じく行く。相して云はく、「福分おはしまさず」と

一緒に(耳を買った僧が)行く。人相見が(耳を買った僧の)人相を占って、「幸運(な人相)はおありにならない」

云ふ時に、耳買ひたる僧の云はく、「あの御坊の耳、

と言うと、

耳を買った僧が、

「あの(福耳の)御坊の耳を、

その代銭かくのごとき数にて買ひ候ふ」と云ふ。

代金いくらいくらで

買いました」

と言う。

「さては御耳にして、明年の春のころより、

「それならば、

御耳のおかげで、

来年の春ごろから、

御福分かなひて、御心安からん」と相す。

幸運に恵まれて、

御心穏やかでいられるでしょう」と占つ。

さて、耳売りたる僧をば、「イ耳ばかりこそ福相
ところが、耳を売った僧（の人相）については、
「耳だけは
幸運な相が

おはすれ、その外は見えず」と云ふ。

おありだけでも、その他は（吉相は）見当たらない」と言う。

かの僧、当時まで世間不階の人なり。「かく耳売る
その（耳を売った）僧は、今現在まで、暮らし向きがよくない人である。
「このように耳を売る

ひんぐう

事もあれば、貧窮を売ることもありぬべし」と思ひ、
こともあるのだから、
貧乏を売る「II手放す」ことも
「きつとあるだろう」と思い、

あずま

はべ

がくしやう

南都を立ち出でて、東の方に住み侍りけるが、学生
奈良を
立ち去って、
東国に
住んでおりましたが、
学識を持った僧

にて、説法などもする僧なり。
で、説法などもする僧である。

しやうにん

しやう

ある上人の云はく、「老僧を仏事に請ずる事

ある高僧が（この耳を売った僧に）言うには「老いた私を

仏事に

招待している用事が

あり。身老いて道遠し。ウ予に代はりて、赴き給へ
ある。（私は）年老いているし、道のりが遠い。
私に代わって、
出向いてください

みつかぢ

せもつ

かん

かし。ただし三日路なり。想像するに、施物十五貫
よ。ただし、三日かかる道のりだ。
予想では、
布施は
十五貫を

もん

ひとひぢ

文には過ぐべからず。またこれより一日路なる所に、
超えはしないだろう。
また（別件で）ここから
一日の道のりの場所に、

うとく

ぎやくしゆ

ある神主の有徳なるが、七日逆修をする事

ある金持ちの神主が、

七日間にわたって逆修（II生前に死後の冥福を祈る仏事）をする仕事

せうしやう

あり。これも予を招請すといへども行かんことを
がある。これも
私を
招待する
と言っているけれども、行こうという

むげ

欲せず。これは、一日に無下ならば五貫、ようせば
気にならない。こちらは、
一日あたりに最悪五貫、
うまくすると

十貫づつはせんずらん。公こう、いづれに行き給はん」と
十貫きみは、どちらにずつはくれるだろう。行きなさるつもりか」と

云ふ。かの僧、おほ「仰すまでもなし。遠路を凌ぎて、しの
聞く。その（耳を売った）僧は「お聞きになるまでもない。
遠路を耐え忍んで、

十五貫文など取り候はんより、一日路行きて
十五貫文ほどを
取得しますようなのより、
一日の道のりを行って

七十貫こそ取り候はめ」と云ふ。「しからば」とて、
七十貫を
取得しましょう」と答える。
（高僧は）「それならば」と言って、

一所へは別人をして行かしむ。神主のもとへはこの
べつにん
もう一か所へは 他の僧に
行かせる。
神主の
所へは、
この

僧行きけり。
僧が行った。

既に海を渡りて、その処に至りぬ。神主は齡
はちじゆん
既に 海を渡って、
その（神主の）場所に到着した。
神主は
年齢が

八旬に及びて、病床に臥したり。子息申しけるは、
八十歳に
達して、
病で
臥せている。
（その神主の）息子が申し上げたことには、

「老体の上、不例日久しくして、安泰頼み難く候へ
（父は）老体に加えて、
病気である月日が長くて、
回復は
期待し
づらいです

ども、もしやと、先づ祈禱に、真読の大般若
ま
きたう
しんどく
だいはんにや
けれども、ひよつとすると（回復するのでは）と（期待して）、まずは祈禱として『大般若経』の真読（Ⅱ省略せずに

ありたく候ふ」と申す。「また、逆修は、いかさま用意
読誦すること」をお願いします」と申し上げる。
「また、
逆修は
ぜひとも（私たちの方で）

仕り候ひて、やがてひきつぎ仕り候はん」と云ふ。
つかまつ
準備いたしましたして、
そのまま（祈禱に）続いて、
致します
と云う。

この僧思ふやう、「先づ、大般若の布施取るべし。
この僧が
思うことには
「まず、
大般若経の（分の）布施を
もらおう。

また逆修の布施は置き物」と思ひて、安きことにて
また、逆修の布施は 手に入つたも同然だ」と思つて、 「お安い御用です。

候ふ。参るほどにては、仰せに従ふべし。

参上したからには、

仰る通りにしましょう。

いづ

こと

わ

何れも得たる事なり。殊に祈禱は吾が宗の秘法
(大般若經の真読も逆修も)どちらも(私の)得意なことです。特に祈禱は私の宗派の 秘宝

なり。必ず靈驗あるべし」と云ふ。
である。 必ず 効果があるにちがいない」と言う。

「さて、酒はきこしめすや」と申す。大方はよき
「ところで、(お坊様は)お酒は召しあげますか」 と(尋ね)申し上げる。およそ 酒好きでは

じやうじやう

しんがう

上戸にてはあれども、「酒を愛すと云ふは、信仰
あるけれども、 「酒が好きだ」と言うて、 信仰心が

薄からん」と思ひて、「いかにも貴げなる体ならん」
薄いだらう」と思つて、 「ぜひと も 尊ぶ僧の 風格でいよう」

と思ひて、「オ 一滴も飲まず」と云ふ。「しからば」と
と思つて、 「一滴も飲まない」 と答える。 「それならば」 と

もち すす

て、温かなる餅を勧めけり。よりて、大般若經の
言つて、(神主の家族は)温かな餅を勧めた。

そこで、(僧は)大般若經の啓白「興趣旨や願意を仏に

けいびやく

啓白して、かの餅を食はしめて、「これは大般若の
申し上げることをして、その餅を(神主に)食べさせて、

「これは 大般若經の

びやうじや

ほふみ

法味、不死の薬にて候ふ」とて、病者に与へけり。
法味、 不死の薬で 「ございます」と言つて、 病人に 与えた。

病者貴く思ひて、臥しながら合掌して、三宝諸天の
病人は 尊く 思つて、 横たわつたまま 合掌して、 三宝諸天の

ふ

がつしやう

さんぼうしよてん

御恵みと信じて、一口に食ひけるほどに、日ごろ
御恵みだ と信じて、 一口で 食べた ところで、 二三日間、

不食の故、疲れたる氣にて、食ひ損じて、むせけり。
ふじき け
何も食べていなかったので、噛み疲れた様子で、
うまく食べられず、
むせた。

女房、子供、抱へて、とかくしけれども、かなはず
女房と子供が(神主を)抱きかかえて、
あれこれ
したけれども、
思い通りにならず、

して、息絶えにければ、中々とかく申すばかりなく
死んでしまったところ、
(神主の家族は)かえってあれこれとも(責め)申し上げようも
あな

して、「孝養の時こそ、案内を申さめ」とて返し
けうやう
亡き親の追善供養の時に、
ご連絡を
申し上げましょう」と言つて、(僧を)帰した。

けり。

歸る路にて、風波荒くして、浪を凌ぎ、やうやう
みち
(僧は)歸る道では、
波風が
荒く、
波を
乗り越えて、
なんとか

命助かり、衣裳以下損失す。

命からがらで、
衣服を始めとして全てだめになった。

また今一所の経営は、布施、巨多なりける。
こた

(耳を売った僧が選ばなかった)もう一か所の営みでは、布施が莫大だった。

これも、耳の福売りたる効かと覚えたり。
しるし

これも、
福耳の幸運を
売ってしまったせいか
と思われた。

そご

万事齟齬する上、心も卑しくなりけり。

全てにおいて意図したとおりにならない(で不運な)上に、心も卑劣になってしまった。